

古今集113番歌「花の色は」を起点とする「うつろひ」の教材解釈

——次期高校国語科学習指導要領に向けて——

三谷昌士

一 はじめに

令和4年度から実施される次期高校国語科学習指導要領の改訂に尽力された大滝一登氏は、「変わる―高校国語の新しい理論と実践」の巻頭理論提言「変革期の高校国語科教育を展望する」において、「教材ありき」のこれまでの授業は「読み取り」をめざすものに偏っており、古典の授業においては「訓詁注釈」めいた一言一句の意味を手堅く押さえていく授業」が多かったと指摘する。そして「取り扱われるテキスト（教材）」は、読み手による主体的な解釈や評価の対象ではなく、解釈や評価があらかじめ「定まった」ものであり、そこでは、授業は、『知らない』生徒に『知っている』教師が一方的に与える場になっている」と断ずる。

また、次期高校国語科学習指導要領の改訂の基本方針として「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める」ことをかかげ、留意して取り組む点の一つに次のことをあげている。

④ 深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重

要になること。各教科等の『見方・考え方』は、『どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか』というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、生徒が学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

（高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編第一章総説 第一節 改訂の経緯及び基本方針）

今回大滝氏の指摘を乗り越え、次期高校学習指導要領が求める「深い学び」と「見方・考え方」を働かせること」につながる教材解釈について提言を行う。具体的には、小野小町詠古今集・巻二・春上・113番歌・題しらず「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」②（以下「花の色は」歌と記す）を起点とした新しい切り口の和歌教材解釈の論を展開していく。

二 「花の色は」歌の「花の色」の「うつろひ」

(一)「花の色」の「うつろひ」の解釈に関する新しい切り口

現在の高校の授業での「花の色は」歌の「花の色」の「うつろひ」⁽³⁾の一般的解釈は、次の青木生子氏の論の通りであろう。

この一首にさまざまな意味と気分を醸し出そうとしている。

「花の色」は桜の美しさと容色の美に掛け、「うつる」は衰えることで、桜の色あせるのと美貌の衰えるのと両方の意を持たせている。…中略…世にふる」は世に経るで年をとること。又

次の「ながめ」(長雨)の縁語で降るの意を持たせている。「ながめ」は愁に沈んでいる時等、何となくじつとうちながめられることから、もの思いすることを言い、長雨の意をこれに掛けている。

しかし、「花の色」の「うつろひ」に関しては、伝統的に「宗祇抄」下の心は、小町が我身のさかりのおとろへ行様をよめり」と、契沖「古今余材抄」「ながめとは、心のなぐさめがたき時は空をながめて物思ふさまをいふ。…小町がうたにおもてうらの説ありなどいふこと不用」と二つの考え方があつた。ただし、「宗祇抄」と「古今余材抄」を比較するにあつては、前者は百人一首の注釈書であり、後者は古今集の注釈書であることに注意を要する。

そのことも踏まえた井ノ口史氏が「三〇〇年以上も前の『古今集』の撰者達の構築した美意識と、定家が『百人一首』としてまとめ上げた際に基準とした歌の世界とに懸隔があることは否定できない」⁽⁵⁾

と問題提起し、「花の色は」歌の「花の色」が小町の容色を言い掛けているという解釈が揺るぎないものではないと指摘している。岩波書店新日本古典文学大系(以下「新古典大系」と記す)「古今和歌集」の脚注も「作者の容色を掛けるとする説もある」としている。

以上のように「花の色は」歌の「うつろひ」小町の容色の衰え」という考え方は決して自明なこととは言えない。

この章では「花の色は」歌の「うつろひ」小町の容色の衰え」を前提とする授業を見直し、「花の色は」歌の「うつろひ」についての二通りの解釈の根拠について理解することが、次期高校学習指導要領が目指す深い学びや探究的な学び(複数の説とその根拠を理解し、自分なりの解釈に到達すること)につながるという和歌教材解釈論を展開する。

(二)「花の色は」歌の「うつろひ」小町の容色の衰え」と解釈する根拠

①心物対応構造と「身古る」

古今集には、鈴木日出男氏が説かれる掛詞における心物対応構造のように、物(自然・景)と心(人間・情)を重ね合わせ、融合させることで歌全体に複雑なイメージをもたらす表現が多用される。

鈴木日出男氏は「花の色は」歌について次のように述べる。⁽⁶⁾

「降る―経る」「長雨―眺め」の二組の掛詞を中心に、自然の景を述べる文脈と、人間の心を表す文脈の二筋を重ね合わせるように、歌全体が構成されている。掛詞の技法によって、本来は無関係なはずの自然と人間とを、和歌の表現として統一づけているともみられる。

また「自然の在り方と人間を見比べ、往還する方法は『古今和歌

『集』の典型的な立脚点である」という伊東正美氏の言葉も同じ主旨である。

心物対応構造や自然と人間の往還という古今集の特徴を踏まえれば「花の色はうつりにけりな」には、「桜の花のうつろい」と「わが容色のうつろひ」の自然の景と人間の二つの文脈が重ね合わせられているという解釈が可能になる。

そして、小沢正夫・松田成穂校注小学館新編日本古典文学全集「古今和歌集」の「花の色は」歌には次のような頭注がある。

「世にふる」この世」とも、「はなはだ」とも解せる。「ふ(古)る」は年をふる。…中略：「世に経る」と考えられたのは『拾遺集』以後であろう」そして、同じく「身がふる」の古今集

の用例として次の歌をあげている。(傍線は論者による)とよめりける返し。兼覽王

398 をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにける (巻八・離別)

二条の後、東宮の御息所と申しける時に、めでに削花挿せりけるをよませ給ひける 文屋康秀

445 花の木にあらざらめども咲きにけりふりにしこのみなる時も (巻十・物名)

右大臣、住まずなりにければ、かの昔遣せたりける文どもを取り集めて、返すとて、よみて、おくりける 藤原因香

736 頼めこし言の葉いまは返してむわが身ふるれば置き所なし (巻十四・恋四)

小野小町

782 今とはてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひけり (巻十五・恋五)

1065 題しらす 白雪のともにながが身はふりぬれど心は消えぬものにぞありけり (巻十九・雑躰)

以上のように、古今集の「身ふる」は「身古る」わが身が古びていく・年を重ねて衰えていく」という解釈となる。その古今集の用例に基づく「花の色は」歌の「わが身世にふる」も、わが身がこの世で古びていく意味であると考えることができる。このことと前述の心物対応構造をあわせて考えてみると、花もわが身もともに限りある存在として「うつろふ」という自然と人間の響き合いが「うつろひ」への嘆きをより深みのあるものとするのである。

②古今集仮名序と落魄伝説

古今集の仮名序の小町評は次の通りである。

小野小町は、古の衣通姫の流なり。哀れなるやうにて、強からず。いはば、好き女の、悩めるところあるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし(底本は新古典大系「古今和歌集」)

衣服を通して光っていたと語られる衣通姫になぞらえられていることや、「よき女のなやめるところあるに似たり」という小町に關わる古今集仮名序の記述は、後世になって小町に絶世の美女というイメージが付与される一つの要因になったと思われる。ただし、このことは「花の色のうつろひ」小町の容色の衰え」の根拠ではなく、そういう解釈を生み出す出発点となったものである。

また小町の晩年については、乞食になって流浪し路傍に野ざらしとなつたという落魄伝説があり、代表的なものは「玉造小町壯衰書」である。この漢文で書かれたものは、本来小野小町とは別人の小町のことを歌つたものであるが、例えば平安後期の藤原清輔が記した「袋草子」ですでに小野小町と結びつけられている。⁹⁾

右に述べたことは「花の色は」歌から時代の下ることであり、「花の色」のうつろひ＝小町の容色の衰え」とする根拠とはならないが、「花の色はうつりにけりな」が、そこに小町の容色の衰えを読み取る解釈が可能な表現であるとする根拠となる。

さらに「蜻蛉日記」天曆十年六・七月の記述を検証していく。

六月になりぬ。ついでちかけて長雨いたうす。見出だしてひとりごと

わが宿のなげきの下葉色深くうつろひにけりながめふるまに
などいふほどに、七月になりぬ。たえぬと見ましかば、仮に来
るにはまさりなましなど、思ひつづくるをりに、ものしたる日
あり。ものもいはねばさうさうしげなるに、まへなる人、あり
し下葉のことを、ものついでに、いひ出でたれば、聞きてか
くいふ

折ならで色づきにけるもみぢばはとときにあひでぞ色まさりける

(底本は新古典大系「土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記」所収 今西祐一郎校注「蜻蛉日記」表記は一部変えている)

右の文章は、町の小路の女のもとへ通うようになった藤原兼家の訪れが途絶えていた作者(藤原道綱母)が、ひとりごと「わが宿の」と詠んだ歌を、作者のもとを久しぶりに訪れた兼家が作者の

侍女から聞き、「折ならで」と歌で答える場面である。

新古典大系「蜻蛉日記」の脚注からも読み取れるように、作者の歌「わが宿の」について、「色深く」は作者の歎きの深さを示しているが、歌の直前にある「長雨いたうす」歌の「うつろひにけり」「ながめふるまに」という表現から、作者の歌は小町「花の色は」歌を踏まえていると考えることはできる。

そして、その作者の歌を伝え聞いた兼家の歌の「色まさりけり」が作者の容貌をたたえる表現であることは、新古典大系「蜻蛉日記」の脚注に示されている。

「尊卑分脈」に「本朝第一美人三人内也」と記され、古今集に続く勅撰和歌集である拾遺和歌集に三十六首もの歌が採られている女流歌人である藤原道綱母。「花の色は」歌を踏まえた道綱母の歌に答える兼家の歌に「色＝道綱母の容貌」という表現があることは、「花の色はうつりにけりな」が、小町の容色の衰えを読み取る解釈が可能な表現であると考えられることのできる傍証となりうる。

この項の最後にもう一度小町落魄伝説の論に戻る。落魄伝説が、逆に小町がどれほどの美女であったかという想像をかき立てること(10)を確認する。このことについて馬場あき子氏の次の論述がある。

花を詠じた小町に、惨憺たる老残の姿がふさわしいのは、それが無常盛衰の人間の真の姿を具体的にみせているからだという説明がある。しかしふしぎに、この無残な放浪伝説が加わることによって、小町の美貌はいよいよ本物の感じが増し、罪深い美との葛藤に生きた、したたかな情念の淵を感じさせてくれるのである。

③「花の色のおつろひ」小町の容色の衰え」と解釈しない根拠

①古今集の部立

「花の色は」歌が春部の散る花歌群に収められていることを考えれば、「花の色はうつろひにけりな」は純粹に散り衰えていく花のことを歌っていると考えるのが自然な発想である。もし「花の色は」歌が自身の容色の衰えを嘆く述懐の歌であるならば、古今集の部立の考え方に基づいて雑部に収められているはずである。

近代になって窪田空穂らによって見いだされたと言われる大伴家持の絶唱の三首目に注目する。

うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しもひとりし思へば

(万葉集卷十九・4292)

この歌について犬飼孝氏は次のように述べている。

これは、本当の、家持だけの個人の心の裏を打ち出したものです。まさに、純粹抒情詩という言葉を使えば、純粹抒情詩の極地といえます。そして春の憂いがよく歌われている。つまり

「春愁」というものを歌って幽玄優美な歌として完成していると言われる。そしてよく、こういう調べを持った歌が、平安朝の方につながってゆく大事な鍵だと言われています。

犬飼氏の「平安朝の方につながってゆく大事な鍵だと言われている」という論を踏まえると、「花の色は」歌が、周りの明るい風景と対照的な孤独な物思い(春愁)を詠み上げている家持歌の流れを受け継いでいるという考え方ができる。そうすると「花の色は」歌について次のような解釈も可能になる。

物思いの中、ふと気がつくとき花の色が「うつろ」っていたとい

う春愁の気分を詠みあげる。むなしくという意味の「いたづらに」がアンニュイな気分を醸し出し、「ながめせしまに」は春の

長雨に閉じ込められたけだるさを表現している。

以上のように「花の色は」歌が、家持の春愁の歌の流れをくむ春愁の思いを詠んだ歌だと考えると、春部に収められているのも納得がいく。しかし、「花の色は」歌を春部としたのは、あくまで古今集編者である点には注意を要する。

②他の歌の用例

小町谷照彦氏による「花の『うつろひ』に我が身の容色の衰えを見るのは小町の歌だけであ」という指摘がある。例えば次の歌。

題しらず

小野小町

797 色見えてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける (古今・卷十五・恋五)

寛平御時后宮歌合の歌

素性法師

92 花の木も今は掘り植えじ春たてばうつろふ色に人ならひけり (古今・卷一・春下)

元良の親王、兼茂朝臣のむすめに住み侍りけるを、法皇の召して、かの院にさぶらひければ、え逢ふことも侍らざりければ、あくる年の春、桜の枝にさして、かの曹司に挿し置かせ侍りければ 元良親王

撰後102

花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ

(後撰・卷三・春下)

右の歌は相手の心変わりを嘆く歌であり、「花・花の色」は相手の

心のさまを言い、容色の意味ではない。「花の色」を容色と掛けるという発想が他の歌に見られていない点が、「花の色は」歌でも容色の意を掛けていないとする根拠となる。

三 小町詠「うつろひ」のアンソロジーから小町物語創作へ

(一) 小町詠「うつろひ」のアンソロジー

題しらず

113 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせ

しまに

(古今・卷二・春下)

題しらず

782 今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけ

り

(古今・卷十五・恋五)

題しらず⁽¹³⁾

797 色見えてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

(古今・卷十五・恋五)

右の小町詠三首から、さまざまな「うつろひ」に愁いを覚え、物思いに沈む小町の姿が浮かびあがってくる。782番歌は今まで心通わせてきた相手の言葉の、797番歌は相手の心の「うつろひ」を嘆く歌となっている。この二首の「うつろひ」への哀感・詠嘆という情趣から、「花の色」歌の「うつりにけりな」にも、わが身の「うつろひ」への哀感が込められていると解釈できる。以上のことを青木生子氏は次のように述べる。⁽¹⁴⁾

相手の「言の葉」や「心」の「うつろひ」は、我身の「うつろひ」とともに歎かれ、いかんともしがたい人生のあきらめの響きを帯びてくるのである。

そして「花の色は」歌の「ながむ」が重要である。「ほんやりと見やりながら物思いに沈む」という意味の歌語「ながむ」から「うつろひ」を嘆き、物思いに沈む小町の姿が読み取れる。

紙幅の関係で詳しく論ずることはできないが、「和泉式部日記」「源氏物語」などにおいても、「ながむ」は登場人物の物思いを表現する言葉として重要な働きをしている。片桐洋一氏も次のように述べる。⁽¹⁵⁾

平安時代の抒情の根源は、「我が身世にふる」物思いと、人の心の定めなく移ろい変わりゆくことへの嘆きにあると私は考えているのであるが、その意味で、この「うつろふ」という言葉は「ふる」「世にふる」とともに、平安時代文学のキイワードであると、言っても過言ではないのである。

以上のことを踏まえ、小町詠「うつろひ」三首を踏まえて小町の思いと身の上を文章にする創作活動が考えられる。一首一首の逐語訳に終始するのではなく、複数の歌を歌群として把握して言語活動に取り組むことが、訓詁注釈的な学習の克服の一つの方策となる。

「小町詠「うつろひ」三首から読み取れる小町の思いと身の上」

私の容色は衰えた。あの人の私に向ける言葉も代わっていった。ああ花の色も木の葉も移りゆく。しかし色に表われることなく変わっていくのが人の心。抗しきれない時の流れに身を任せ、私は視線をむなしくただよわせ、物思いに身を沈めるだけである。

この項の最後に「花の色は」歌について別な角度から考えていく。「花の色は」歌の「世にふる」の「世」が「世の中」という意味と考えても、男の来訪を待つだけの身の女性の「世の中」がどれほどのものであろうか。通ってくる男との接点だけが「世の中」と言ってもよいほどの狭い世界である。実際「世に男女の仲」という意味が辞書に掲載されている。片桐洋一氏も「和歌において、『世』という場合、その大半は和歌をよむ人の『世』であり、せいぜい広がってもその歌の受け手をも包み込む程度の、小さな『世』をいう場合が多い」と論じている。以上のように考えると「わが身世にふる」は、相手の男との関わり状況を表現しているとも考えられる。そうすると「花の色は」歌の「花の色はうつりにけりな」に、相手の心の「うつろひ」のニュアンスを読み取れる可能性がでてくる。¹⁷⁾とするならば、今回示した小町詠「うつろひ」三首は相手の心変わりに思い悩む嘆きの歌というくりが可能になる。

(二) 小町物語「小町うつろひの人生」の創作

小町についてはその出自や晩年などの詳細は伝わっていないが、その一生について想像をめぐらすことのできる歌や伝説などのいろいろな材料がある。そういった材料をもとに小町物語「小町うつろひの人生」を創作する言語活動例を提示する。

言語活動案：次の①～④の材料をもとに小町物語を創作する

①古今集仮名序「小野小町は、古の衣通姫の流なり」「よき女のなや

めるところあるに似たり」

②(一)で示した古今集小町詠「うつろひ」三首

小町詠三首のうち古今782番歌については、次の783番歌の小野貞樹の返しの返しの歌もあわせて考える。

題しらす

小野小町

782 今とはてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり
(卷十五・恋五)

783 人と思ふ心の木の葉にあらばこそ風のまにまに風も散り乱れ
め 返し 小野貞樹
(卷十五・恋五)

小町が、わが身が衰えた(古りぬれば)ために相手(貞樹)の私を思う言葉が変わってしまったと哀訴すると、貞樹はあなたを思う心は木の葉ではないので、散りも乱れもしないと返す。小町の歌と、その小町の思いを受け止めきれない貞樹の歌から、わが身の上と恋に苦しむ小町の姿が浮かびあがってくる。また、この贈答歌を男女間の当意即妙のやりとりという捉え方をすると、男女の交流に馴れている恋多き小町の姿が浮かんでくる。どのように捉えるかは生徒の自由に任せたい。

小町詠782番歌が、心物対応構造である点も押さえておきたい。

景：「時雨」に「ふりぬれば(降りぬれば)」「木の葉」が「うつろひにけり」

情：わが身が「ふりぬれば(古りぬれば)」「(相手の)言の葉」が「うつろひけり」

秋山虔氏が「蕭条と降りそそぐ時雨に木の葉の散りいそぐ心象に

托して、年ふりて魅力もうすれ、見すてられゆく『我身』がかたどられる¹⁸⁾と述べる通り、心物対応構造のこの歌には古今集の特徴である自然と人間の響き合いが感じられる。そして相手の言葉の「うつろひ」の原因となったわが容色の衰えが、嘆きの対象となっているという解釈が可能になる。

③小町詠古今集 938番歌

文屋康秀、三河掾になりて、「県見にはえいでたたじや」と言ひやれりける返事によめる

938 わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

(巻十八・雑下・)

この歌について、秋山虔氏は「一見、どうとでもなれとデスベレートに自己を投げだすような体は、もちろんポーズにすぎないの¹⁸⁾で、ここにたとえられる表情は、決して浮薄軽佻ではない。浮萍の根を絶えて流れのまにまに誘われてゆくイメージにわがいのちの姿態を表象し、みごとに繊麗な調べをなしているが、これは康秀におくられたにしても、そうであることを超越して自立し、女として生きることの哀切さを過不足なくかたどりなげく歌となっているのである¹⁸⁾と論ずるが、この歌が詠まれたころの小町の年齢を四十歳前後とする一般的な説に従い、女盛りを過ぎた小町が孤独のわびしさをさびしい生活の中で噛みしめ、康秀の誘いに心揺れている思いをまず読み取ればよい¹⁹⁾。

④小町の落魄伝説

晩年は年老いて哀れな姿になり、貧しく惨めな生活をおくったという話が伝わっているという程度の理解でとどめておく。

小町はその出自も不明であるが、市井の人であったはずはなく、宮中とのかわりを持った女性であったはずである。創作は、美女の誉れ高い宮中の女性というところから始めればよいと考える。

渡部泰明は「和歌は言葉による演技」であると述べる。そして、「現実社会を生きたる『現実の作者』」と、「言葉で描かれた虚構の世界に」存在する「作品の中の作者」が存在し、「歌を作る作者」がその「二人の作者の間を媒介」すると論ずる。「歌を作る作者」が「言葉と向き合い、取捨選択し組み合わせ完成させていく」という「言葉による演技」で「真実と虚構が同居する」和歌を詠みあげ、そして「現実の作者」が「作中の作者」に転じてゆく²⁰⁾と説く。

生徒に対して、現実の小町はあるがままの自分のことを詠み上げているわけではなく、真実と虚構がその境目をなくした和歌の世界の人物を演じていると説明したい。どのような人物・思いを演じているか、どのような演劇空間を構築しているかという観点で小町の和歌を味わい、そしてそれを踏まえて今度は自分が小町を演じることを意識して小町の「うつろひの人生」物語を作り上げていこうという呼びかけをしたい。生徒が「うつろひ」の人生を生きたる小町を演じていくことで、渡部氏の言う、「演技されることで、和歌は詠み続けられてきた」という日本の伝統的言語文化としての和歌的世界を体感する入り口にたつことを期待したい。

四 「うつろひ」の季節感

ここでは古今集の歌によって、季節の「うつろひ」に心揺れ動く

感性が詠みこまれるようになっていくことを取り上げる。

青木氏が「恋愛から人生へとその奥で覗き出されてきたこの『うつろひ』の世界的情感が自然の中にも移感されていかないはずがない⁽²¹⁾」と述べるように、恋や人の身の「うつろひ」に哀惜の念を覚えていったことが、自然の「うつろひ」に対する感性へと拡がっていき、日本の伝統的な季節感になっていく。

まず万葉集・巻八・1418番志貴皇子歌を見てみる。

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春なりにけるかも

この歌は「今、ここ」を詠む。つまり蕨の萌え出た瞬間の春の情景を詠んだ歌である。大岡信氏が、「多くの万葉の歌は、瞬間的な知覚の清新さ⁽²²⁾」を詠み上げると言い、窪田空穂氏が「万葉集の短歌は、空間に力点を置⁽²³⁾き「時間の方はつとめて短く切り縮めて、これを一瞬間の印象にとどめ、反対に空間の方は、つとめて如実にしようとする⁽²³⁾」と述べる通りである。

次に古今集の歌二首を見ていく。

秋立つ日、よめる

藤原敏行

169 秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬ

る (巻四・秋上冒頭歌)

視覚的世界は夏(目にはさやかに見えねども)であつても、頬うつ風に秋の到来を感じている(風の音にぞおどろかれぬ)。まさに夏から秋への「うつろひ」を詠んだ歌である。

春立ちける日、よめる

紀貫之

2 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風や解くらむ

(巻二・春上)

立春の日の東風解凍の歌である。夏(袖ひちてむすびし水)から冬(水のこほれる)へ、そして本日の立春という三つの季節の「うつろひ」が情趣の中心となっている。

万葉集の「今、ここ」を詠む感性から、古今集以降の「うつろひ」を詠む感性が日本の季節に関する伝統的感性となっていく。古今集四季歌の配列が、その季節内のこまかな推移・順行を示していることも、このことと関係が深い。青木氏も「古今集の自然の『うつろひ』は、季節感の発達と深い関連を思わせるものがある⁽²⁴⁾」と述べている。そして後の時代へのつながりは歌以外にも見られる。その一例が、徒然草第十九段、特に冒頭の「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ」である。

五 おわりに

二章では、「花の色のうつろひ」の解釈について二通りの考え方とその根拠を論じたが、今回の提言はどちらが正解かということを追求めるものではない。「花の色のうつろひ」の解釈については古典研究の泰斗達の優れた論文が数多くあるが、決定打となるものはない。答えは出ないもののそれでも自分なりの根拠を見付け出すのが深い学びであり、探究的な学びである。

三章では、逐語訳にこだわらない小町詠「うつろひ」三首の歌を総括的に考える取組や、次期高校国語科学習指導要領が求める言語活動の充実のための具体的な取組を提示した。

四章では、「うつろひ」が人の心などだけでなく、古今和歌集以降

の伝統的季節感へとつながるさまを解明した。ただ紙幅の関係で教材までの論に至らなかった。

以上のように、今回の提言で「うつろひ」をキーワードとした和歌教材解釈の新しい切り口を示すことができたと考えている。

次期高校学習指導要領のスタートとも言える中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会による「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(平成28年8月28日公表)には、次のような指摘がある。

「高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り進む必要がある」

これまでの古典の授業において「教材への依存度の高」さが、読み取り中心の訓詁注釈に終始する授業につながったという指摘は重く受け止めなければならない。しかし、国語科教員が身につけるべき古典に対する専門的素養や、その素養に基づく教材研究の大切さは変わらないはずである。

これまでの教材解釈を見直し、新たな切り口で教材へのアプローチを行った今回の提言が、次期高校学習指導要領が求める「深い学び」と「見方・考え方」を働かせること¹⁵⁾につながるものであり、授業改善の端緒を示すものとなっていれば幸いである。

注

(1) 大滝一登・幸田国広共同編集 大修館書店(2016年11月20日)

(2) この論文で示す歌の底本はすべて岩波書店新日本古典文学大系。ただし一部表記は変えている。すべての歌番号は『新編国歌大観』による。

(3) 「花の色は」歌の「うつる」と「うつろひ」を同列に扱う。その根拠は次の論による。

「うつろひ」の動詞「うつる」は「うつる」に継続態を表す「ふ」のついた語で、『言海』には「移ル」「染ム」「変ル」「衰フ」等の語が雑挙されているが、それらの基底をなす意は、ものの「移動」とか「変化」ということにあるのではないかとと思う。

出典…青木生子著作集第1巻 日本抒情詩論 株式会社おふうふう(1997年12月10日) 所収「附・古今集における『うつろひ』」

(4) 青木生子著作集 第8巻 女流歌人編 株式会社おふうふう(1998年6月5日) 所収 I 女流秀歌鑑賞「勅撰集の女性小野小町」

(5) 井之口史「和歌教材としての『百人一首』—小野小町「花の色は」歌の歌題と展望—」2018年滋賀大学教育学部研究紀要 No.68

(6) 秋山虔編 日本文学史論考 武蔵野書院(2009年12月31日) 所収 鈴木日出男著「秋山文体の成立—文学史のために—」

(7) 伊東正美著「小野小町—人と文学」 勉誠社(2007年9月15日)

(8) (8) は「雷壺に召したりける日、大御酒など賜べて、雨のい

たう降りければ、夕さりまで待りてまかり出でける折に、さかづきを取りて」という詞書を持つ紀貫之の歌「秋萩の花をば雨にぬらせども君をばまして惜しとこそ思へ」に対する返歌である。

- (9) 片桐洋一著「新装版 小野小町追跡」笠間書院（1975年4月5日）を参照にした記述

- (10) 馬場あき子全集 第五卷 古典女流歌人論 三一書房（1995年4月15日）所収 日本女歌伝「花の色はうつりにけりな——小野小町——」

- (11) 犬飼孝著「万葉の人びと」PHP出版 1978年9月30日

- (12) 国文学 解釈と鑑賞 小野小町と和泉式部 至文堂（1976年1月1日）所収 小町谷照彦著「小野小町における『うつろひ』」

- (13) 古今集797番歌については新日本古典文学大系では「色みえて」とあるが、脚注の中世注の考え方をとり「色見えで」とした。

- (14) (3) の出典に同じ

- (15) 片桐洋一著『歌枕歌ことば辞典 増訂版』笠間書院（1999年6月20日）【うつろふ】の項目

- (16) 出典は(15)に同じ。【よ】の項目。

- (17) 田中喜美春は、その著『小町時雨』（1984年12月15日）岩波書店において『花の色』に相手の心をよそえている」という考えを展開する。

- (18) 秋山虔著「王朝女流文学の形成」塙書房（1967年3月25日）。

- (19) ここで述べていることは、次の論をもとにしている。（出典は

- (9) に同じ）

戯れの応答であっても、まことにわびしく、悲しい歌である。三河掾と言えば七位か八位の卑官である。そんな康秀について行きましようというぐらいだから小町もずいぶん零落していたと解する読者があっても当然である。これもまた小野小町落魄説話の形成に大いなる役割をはたしたであろうと思うのである。

- (20) 渡辺泰明著 岩波新書「和歌とは何か」（2009年7月29日）岩波書店

- (21) 久松潜一・實方清責任編集 日本歌人講座 中古の歌人 弘文堂（1960年12月5日）所収 青木生子著「在原業平——附・小野小町——」

- (22) 大岡信著「古今和歌集の世界」岩波書店（1999年7月9日）

- (23) 窪田空穂全集 第二十卷 古今和歌集評釋Ⅰ 角川書店（1965年8月15日）所収「古今和歌集概説」

（学校法人片山学園倉敷翠松高等学校）